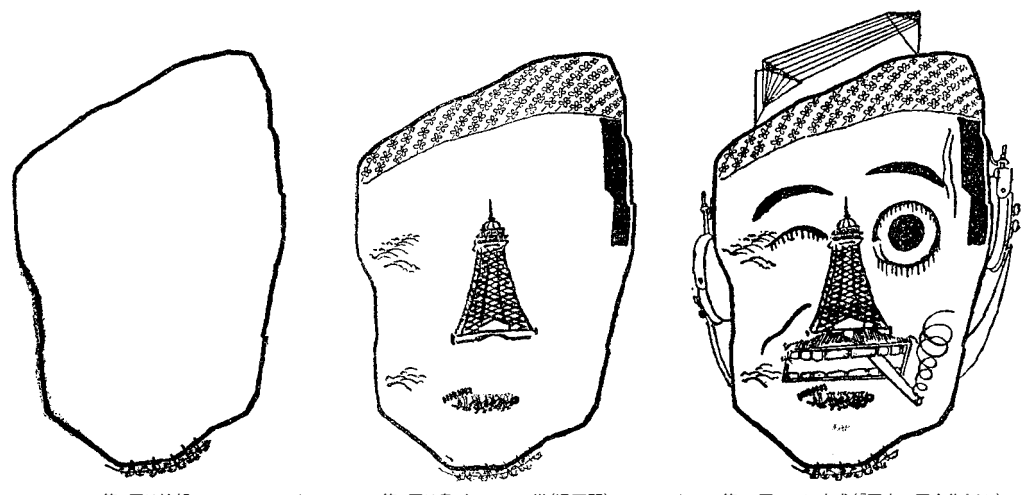


おおさか
KEY
わーど
第48回

近代の大阪人の思い色々

新世界でボンジュール



第1回は輪郭 → 第5回は鼻がエッフェル塔(通天閣) → 第15回ついに完成(『岡本一平全集』より)

7月14日は「パリ祭」だ。モダニズム時代の大阪は、「花の都 巴里」に似た街というイメージをアピールしようとしていた。

これでパリというには頼りないが、有名な例では、明治45(1912)年、第5回内国勸業博覧会の跡地に遊戯施設のルナパークとともに、当時東洋一の高塔の初代「通天閣」が建設される。凱旋門の上にエッフェル塔をのせたデザインで、眼下に広がる新世界の街路も、パリの街路を意識して「通天閣」から道路が放射状に広がるといった念のいれようである。

つづいて大正14(1925)年、大阪市が第二次市域拡張で東京市を抜き、日本第1位、世界第6位のマンモス都市「大大阪」になったとき、「漫画漫文」で知られる岡本一平(1886~1948)が、ユーモアとエスプリに溢れる「大大阪君似顔の図」(全15回)を大阪朝日新聞に連載する。一平の夫人は小説家の岡本かの子、子息が画家の岡本太郎である。連載第1回では、地図上の大阪市の新しい区画を顔の輪郭に決め、連載ごとにパーツが増えて顔全体ができあがる企画である。その第5回目では、新世界へ「エッフェル塔」を見物に行き、大大阪君の鼻に「エッフェル塔」が採用される。むろん初代の「通天閣」のことだが、面白いことに一平は決して「通天閣」と書かずに「エッフェル塔」で貫いている。

そして完成した「大大阪君」の顔は、新しく編入された新淀川以北一体の大根畑をベレー帽にみたくて、工場の煙突の巻きタバコを吸う。その姿はフランスの労働者か芸術家を思わせる。商工業都市・大阪ならば、アメリカ式の金満家をモデルにシルクハットに太い葉巻をくゆらす資本家の顔でもよいのだが、一平はそうではなく、庶民的で文化的な香りを漂わせた雰囲気、新しい「大大阪」に見いだそうとしたのである。フランス憧憬は画家としても当然かもしれない。大正中期に在阪

の洋画家が仲間と道頓堀に開いたカフェ「キャバレー・ヅ・パノン」の店名もフランス趣味だったし、夜の道頓堀にヴェネチアのゴンドラを浮かべたらと言う話もあった…アッ、これはイタリアか。

昭和11(1936)年の『大阪案内』(大阪之商品編集部発行)の函の装釘にも、放射状の街路に、エッフェル塔もどきの通天閣に市役所、市章の滲つくしの標識、交通整理のポリス、大阪城天守閣、四天王寺の五重塔が描かれる。昭和12(1937)年に大阪市電気局・大阪市産業部が制作した映画『大大阪観光』(大阪市指定文化財)も、セヌ川の遊覧船のように観光艇「水都」が、シテ島を思わせる中之島から出航する。

当然のことだが現実の大阪がフランス風だったかは別問題であり、評論家のおおやそういち大宅壮一は「大阪は日本の米国だ」(大阪毎日新聞、昭和4(1929)年)と論じている。大宅によると米文化は「観念文化ではなく、生活文化」「徹頭徹尾、実生活に即した文化」「政治や思想ではなくて、経済を基礎とする文化」である。大阪も同じ「生活文化」優先の傾向を帯びた街だというのだ。しかし、それも比喩であって当時の大阪人がどう思ったかは分からない。工業都市として「東洋のマンチェスター」と呼ばれた時代もあり、それなら大阪はイギリスである。

現代の大阪を、外国の都市との比較で呼ぶならばどこに似ているというべきか? アジアの都市も入ってくるだろう。皆さんのご想像にお任せします。



初代通天閣とルナパーク